



河合文化教育研究所

主任研究員 丹羽健夫

教育を 読む

ご存知「ゼロ戦」^{れいしき}—零式艦上戦闘機は第二次世界大戦中に活躍した日本海軍の名戦闘機である。制式に採用された昭和15年時点で、戦闘機として必要な性能、空戦能力（身軽さ）、速度、航続距離、火力、そして搭乗員の技量、いずれにおいても他国のその追従を許さなかった。

本書はゼロ戦を駆って、中国大陸、フィリピン、果ては南太平洋はニューブリテン島ラバウルから、ニューギニア島、ガダルカナル島などに長駆戦った一兵士坂井三郎の記録である。戦闘機乗りとして撃墜した敵機は64機を数える。

太平洋戦争の最初の一年は勝ち戦さであった。その間に坂井三郎たちが戦った相手は、米軍の戦闘機の場合グラマンF6Fヘルキャットなど10機種におよぶ。しかし我が日本海軍は大戦の始まりから敗戦間際まで、ほとんどゼロ戦一本槍である。悲しいではないか。工業力の圧倒的



『大空のサムライ』上・下

坂井 三郎著
講談社+α文庫
定価 880 円+税

な差なのである。

一方米軍は、味方領内に墜落したゼロ戦を徹底的に分析し、弱点を掴み次期戦闘機に対策を盛り込んだのである。こうしてゼロ戦の優位は次第に削がれていく。また日本海軍の伝統として、熟練搭乗員の名人芸を重んじ、かつ「攻撃は最大の防御なり」と重火力（20ミリ機関砲2丁、7.7ミリ機関銃2丁）を頼みにして防弾装備を怠ったのである。このためベテランパイロットも次々に失われていく。ちなみに坂井が初歩練習機で訓練を受けた4人のグループのうち、坂井を除く3人と教員までが終戦までに戦死している。

坂井三郎自身も、太平洋戦争の天目山となったガダルカナルの空戦で、頭部と片目に被弾し八時間半の飛行の末、意識朦朧としてラバウル基地に帰着する。その後坂井は、終戦直前の硫黄島の戦いで再び空戦に挑むが、隻眼ではもはや華々しい戦はできない。

古来、戦は「やあやあ吾こそは何の太郎兵衛に候。見参、見参」などと掛け声をかけて闘った。そのうち武器が進化しても何人の敵を血祭り

に挙げたなどと競い合った。これから後もし戦があったとしても、多分電子戦であり個人の見えないスクリーン上での戦になるであろう。その意味で坂井の闘った第二次世界大戦は、敵味方の個人が見える最後の戦いとなるであろう。

ゼロ戦は大戦中に約一万機が製造され、その殆どが失われた。ゼロ戦一機の値段は一説によると現代の価格に換算すると、3億円だそうである。一万機ならば3兆円である。戦争とは金の掛かるものである。

本書には人間くさいエピソードが随所に出てきて笑わせる。例えば中国大陸での日本軍と中国軍の地上戦を、坂井が上空で見ていると、戦の傍らで農民がそしらぬ顔で大地を耕している。また飛行兵の試験のひとつに、骨相家が適正を骨相学上から調べたなど。

今年にはあたかも終戦70年目である。きな臭い議論もでてきている。本書は戦争を考える取っ掛かりを与えてくれると思う。

尚、本書は米国はもちろん、カナダ、フィリピン、フィンランドなど多くの国で出版され、読まれている。